

本書回顧録に寄せて

ジャーナリスト

前日本外国特派員協会会長

デイブ マツコムズ



時流に抗って

永山妙子の回顧録は、日本経済の台頭を、その舞台となったオフィスや役員室の内側にいながら、外部の視点から捉えた稀有な現場の記録である。米国とフランスの銀行で36年にわたるキャリアを積む中、彼女は男性優位のエリート社会から締め出された日本人女性として、グローバル金融の世界を生き抜いた。本書の核心的な皮肉は、その力強さにある。永山が成功したのは、日本文化を拒絶したからではなく、規律・準備・自制というその強みを活用しつつ、世の通念が女性に課していた限界を拒絶し

たからだ。その結果、一人の女性が自分を脇に追いやるうとするシステムをいかに巧みに出し抜いたかを描いた、鋭く、魅力的で、読み応えのある記録が生まれた。

この特異な視点が本書に説得力と鋭さを与えている。日本の経済的台頭を描く大半の叙述は、学者やジャーナリスト、政策立案者といった距離を置いた立場から書かれている。しかし永山は、トレーディングフロアや融資デスク、会議室という現場から筆を執る。しばしば彼女は、その場に居合わせた唯一の女性であり、唯一の日本人でもあった。彼女の経歴は、商業銀行（Commercial Bank）からベンチャーキャピタル、現代投資銀行（Investment Bank）の台頭に至る日本の金融界の成長そのものを辿るが、常に権力が実際にどう機能するかを人間的な視点で捉えている。

物語を説得力あるものにしてるのは、彼女が目にしたものだけでなく、彼女自身が乗り越えなければならなかった困難だ。彼女が「病的な男性優位の伝統」と呼ぶものへの観察は、学術的な批判ではない。日々の戦いの現場ノートなのだ。北米を単独ヒッチハイクで横断したエピソードは余談ではない。日本人女性が期待されず、歓迎も保護もされない領域を航海し続けたキャリアそのものの比喩なのである。

しかし本書で最も興味深い緊張感は、永山がいかにして成功を収めたかにある。彼女は日本のジェンダー階層を容赦なく批判する。だが同時に、彼女の成功が「規律」「抑制」「準備」「儀礼的な人間関係尊重」といった深く日本的な特質に支えられていたことも明快に示している。日本証券取引所グループCEO斉藤惇の序文はこの皮肉を端的に捉えている。彼女の「揺るぎない日本精神」が西洋金融界での競争優位性となつたと述べるのだ。これは文化的ノスタルジアではない。戦略である。

永山は日本社会を離れてキャリアを築くが、道徳的拠り所としての日本を決して放棄しない。彼女の根底にある衝動は、日本への拒絶でも逃避でもなく、実力による改革である。

マクドナルド日本創業者・藤田のような人物との出会いが、この世界観を結晶させた。彼女が導き出した教訓は、成功にはアイデンティティの放棄が必要だということではなく、文化の強みは文化的制約とは別物なのだということだ。異なる文化的システム間を移動し、何が期待されているのかの解釈に沿って、礼儀と粘り強さを組み

合わせる彼女の能力は、グローバル化する金融世界において決定的な優位性となった。読者、特に国際的なキャリアを考える若い日本人女性にとって、本書は単なるインスピレーション以上のものを提供する。日本の金融システムが開かれ、グローバル資本の存在が加速し、決して曲がるよう設計されていない障壁に女性達が挑戦し始めた、特定の歴史的瞬間を捉えているのだ。永山はそれらの障壁が消えたふりをしない。代わりに、それらがどう回避され、迂回され、時に武器化されたかを示す。

一人の女性の逆境を乗り越えた昇進を通じて日本の金融進化を描くこの回顧録は、歴史的に啓発的であると同時に予想外に娯楽性に富んでいる。市場と金銭の物語であると同時に、不屈の精神、皮肉、そして不正なゲームのルールを掌握することでそれを打ち破った静かな満足感の物語でもある。